

## クウェート政府奨学金

### 2005年—2006年度留学生

#### クウェート留学体験記

放送大学院文化科学研究科 川嶋 淳司

夕焼け空を見送ってから響くアザーン（礼拝の呼びかけ）の声。人けのないクウェイト大学キャンパス。お気に入りの学生寮4F洗濯室から見る夕日。

帰国してなお、夕暮れ時などクウェイトを思い出すことがままある。懐かしいクウェイトでの一年間を、つけていた日記をもとにふり返ってみようと思う。この日記帳も新入寮祝いにクウェイト大学からいただいたもので、ちょうどラマダーン（断食月）のころ、皆と日中の断食を終えて食堂で困むにぎやかな食事が楽しかったのを覚えている。

週末木曜日の一日。

閉まりかけの学食から朝食をくわえて、バスに乗る。週末なのに早起きなのは、日本人補習校でこの日クラスを持っているからだ。朝方週末のバスは楽しい。18番線、決まったバス停で野菜をかごに積んだおじさんが乗ってくる。この野菜おじさんがキュウリを乗客に配り出すと、大声の会話が始まる。キュウリは断ってしまったが、エジプト方言で受け答えるとうれしそうだった。クウェイト人の友だちたちはほとんどバスに乗ったことがない。彼らも知らないクウェイトの顔。

補習校に着くと、もう子供たちがはしゃいでいて、もみくちゃになる。クウェイトの子も日本の子も関係なく元気だ。担当した小6クラスは生徒一人。教科書もほどほどに、二人の交換日記を読み合う。これは帰国後、引越し先にも持っていき思い出のノートになっている。クラスが終わると昼過ぎ。気温は体温をゆうに超える。日陰づたいを吟味しながら、ランチは大衆食堂へ。毎週木曜の行きつけになっているこの店は、シリア人の若店長とエジプト人のおじさん店員が辞書にないアラビア語を教えてくれる。数百円でお腹いっぱい。

大学寮に戻ると昼寝時間。相部屋のアフガニスタン留学生アターウツラーはすでに夢の中。運良く日没前に目覚めたら、洗濯室に夕日を見に行こう。その後は、週末だからきつと部屋に誰か来るはず。夜のスークに繰り出すかもしれない。最近では、台湾からの留学生ムアイヤドと校舎屋上に登ってギターを弾きまくるのが個人的な流行だ。

7月18日（火）の日記。

授業をやっつけて、いつもだったら学食でランチ→昼寝のところ、今日は違う。もうすぐお待ちかねの Diwaniya Sharq Asia が始まる。これは、クウェイト大学社会科学部の東アジア交流課と在クウェイト日本大使館の後援で、クウェイトと東アジアからの学生がクウェイト伝統の集会形式ディーワニーヤで対話するという催しだ。グループごとに話し合われるトピックも経済問題から若者の暮らしぶりなど幅広い。自分のグループでは教育を取り上げ、日の丸・君が代問題をアラビア語で話すのに四苦八苦。東アジア諸国大使館からの招待客や大学関係者も足を運び、豪華なディーワニーヤとなった。

当日だけでなく、開催のため学生同士で数週間、ランチ片手に準備を重ねた中に暖かい交流があった。クウェイト方言、英語、中国語が飛び交い、アラブによくある TV 討論番組(すごく激しい!)さながらのシーンもあった。今でも連絡を取り合う仲だ。この手作りの対話が今回限りで終わるのでなく、学生の間で引き継がれて恒例のディーワニーヤになり、大学内グローバルホールにある日本ブースがさらに活気づけばと期待している。

クウェイト政府奨学金留学生は次年度より五人に増員された。クウェイト政府とその英断に感謝し、また日本人学生に貴重な機会がさらに広がったことをうれしく思う。クウェイトの友人、それぞれに帰国した同期留学生のみんな、お世話になった邦人の方々。素晴らしい縁に感謝しながら、親交をずっとあたためていきたい。今日、中国から中秋の名月を祝うグリーティングカードが届いた。Assalam aleikum!!と始めて返事を書く。

※ 本稿は、日本クウェイト協会『danah』(No. 218, 2007年2月号)より、関係者の許可を得て一部編集・転載したものです。